

The 30th Princeton Japanese Pedagogy Forum

Study Abroad: Significance and Possibilities

今改めて留学を考える

May 4, 2024
Princeton University
Robertson Hall

SCHEDULE

Robertson Bernstein Gallery

8:00 - 8:50 a.m. Registration and Breakfast

Robertson 100 Arthur Lewis Auditorium

8:50 - 9:00 a.m. Opening Remarks

9:00 -10:00 a.m. – Keynote Speech

Robertson 100 Arthur Lewis Auditorium

Teja Ostheider (Kwansai Gakuin University)

留学と「共通語としての日本語」(日本語)

コロナ禍で留学者数が急減したのは周知の事実ですが、以前より日本の学生が留学に対して消極的であることが報告されています。日本の内閣府が2018年に行った調査によると、「外国留学をしたいと思わない」と答える13~29歳の人が半数を超えました(内閣府2018)。それを受け、日本政府が2023年~2033年の間に50万人の学生を海外へ送り出す目標を掲げました(文部科学省2023)。

一方、経済的支援と「グローバル人材」「世界市民」などの「プラスチック・ワード」だけでは、目標を達成するのは難しいと思われます。学生に「日本代表」としての留学を求める風潮を問い、学生個人に留学の意義と目的について考える機会を与えるのが急務です。また、日本で留学が語られる際、「日本に来る留学生には日本の良さを覚えてもらいたい」と言いながら、「海外に渡る日本人には母国の良さを再認識してほしい」といったレトリックにしばしば出会います。今こそ、根強い自文化中心主義と、その背景にある、「違い」を強調しがちな「異」文化理解教育を問いなおす好機であるかもしれません。

私が愛車のバイクを売り片道の航空券を手に入れ、私費留学生として京都にやってきたのは25歳の秋でした。当初予定していた1年間の「留学」は、30年間以上の「在留」となりましたが、個人的には、「違い」より、互いの共通するところに目を向けることを大切にしてきました。それは、留学中の支えとなり、また言語と文化に対する理解のカギともなっていると考えています。本講演では、自分の留学経験を踏まえながら、現在まで体験、観察してきた「共通語としての日本語」に焦点を当て、「意識」「政策」「実態」という3つの観点から、そのあり方を模索していきたいと思えます。

15-minute Break (10:00 - 10:15 a.m.) Drinks and cookies will be served.

10:15 -12:15 p.m. – Session 1

Session 1 A: Robertson 001

Session Chair: Shinji Shimoura (William & Mary)

10:15-10:45

Yoko Sakurai (Baruch College, The City University of New York)

日本語母語話者による中級日本語クラスでの〈やさしい日本語〉の使用実践と意識の変容—母語話者と非母語話者の共同クラスの実践より—(日本語)

外国語クラスの形態はますます多様化しつつある。米国東海岸にある発表者の勤務大学では、2022年から日本人留学生などの日本語ネイティブスピーカー（以下 NS）が希望し条件が合えば、中級学習者（IL～IM）対象の日本語クラスに登録が可能となった。これにより NS とノンネイティブ中級学習者（以下 NNS）の共同クラスが実現したが、その際 NS が単に TA に準ずる役割に留まるのではなく、洞察に富んだ学びを得るための課題設定が必要となった。熟考の結果、NNS との対話手段となる〈やさしい日本語〉（庵 2016）の習得と使用、及びそれを通じて多文化共生について考えを深めることを NS のコース目標に定めた。具体的には、授業外で〈やさしい日本語〉や多文化共生関連の文献を批判的思考を交えて読み意見を提出し、授業中の会話活動ではグループの一員として〈やさしい日本語〉を使って会話を続ける実践の場とした。過去 3 学期間の人数構成は全登録者 15～25 人中、3～5 人が NS という内訳であった。日本では海外からの移住者の増加に伴い多文化共生の鍵となる〈やさしい日本語〉が提唱され進化を続けているが、その理解者と使い手の養成も課題である（柳田 2019）。本実践で対象としている日本人は、米国在住の英語非母語話者という、言わば海外在住”当事者”である。本発表では彼らが〈やさしい日本〉を解釈・実践する中でどのような意識を持ったのか、作文や学期末のエッセイ、インタビュー等を分析しながら考察する。そして、これが比較的特殊な事例であることを踏まえつつ、本実践が多文化共生の理念の普及に貢献し得る可能性について論じたい。

10:45-11:15

Chikako Cooke (University of Texas at Austin)

シラバスを変える：ウェルビーイングに焦点を当てた学習環境の考察(日本語)

「ウェルビーイング」とは心身良好 (well) である (being) 状態をいう。このカタカナが日本語として定着したのはここ数年ではないだろうか。言葉自体は 1946 年に登場し、2015 年からは持続可能な開発目標 (SDGs) の一つに入っている。しかしながら、パンデミック以前の教育界は、21 世紀型スキル重視の実践的な学習法、役に立つ内容と実用性が優先された報告が一般的で、授業におけるウェルビーイングの観念は二の次にされていた気がする。ところがパンデミックによって強いられる様々な困難から、体だけではなく心の健康面の問題も世界中で顕著に現れた。教育界でも体と心のケアを重視する授業や SEL が注目を集めるようになった。パンデミックを経て、個人的にも心身の健康状態の重要性を実感し、大学主催の専門家によるウェルビーイングのワークショップに参加した。そこで学んだ知識を日本語のクラスに取り入れ、日本語学習内容と共に学生の健康を考慮した学習環境を目指した。Promoting Well-being in Learning Environments ガイドラインを参考に、クラス目標、授業形態、ルール、評価基準などシラバスを大幅に変更した。ウェルビーイングの観念は教育機関で定着したと思われるものの、今現在、ACTFL をはじめとした各学会の発表カテゴリーやトピック、教育ルーブリックなどで「体と心の健康」「ウェルビーイング」といった項目はあまり見ない。今回の実践報告を通じ、日本語教育界においてウェルビーイングへの意識を少しでも高め、新しい学習環境の構築に寄与できたらと思う。

11:15-11:45

Shinsuke Tsuchiya (Brigham Young University)

Welfare linguistics and the language pledge: Translanguaging and language policing in a domestic language immersion program in the U.S. (English)

Domestic language immersion programs provide opportunities for participants to immerse in the target language without “studying abroad.” Such programs often consist of a group of language learners and a teacher or a language facilitator who have signed a language pledge to communicate with each other in the target language. Interestingly, despite the expectation to communicate “only” in the target language in the program, translanguaging practices (Canagaraja, 2013; Wei, 2018, etc.) are often observed with participants switching and mixing different language resources for accurate and smooth exchanges of information as well as forming social connections (Bown et al., 2011; Hasegawa, 2019; redacted).

This presentation analyzes the perceptions of translanguaging practices in a domestic Japanese language immersion program in the U.S. through the lens of welfare linguistics (Tokugawa, 1999; Heinrich, 2021; Otsuji, Kumagaya, and Sato, 2021). By using survey and interview data from participating students from the Japanese, Chinese, and Korean Houses with insights from supervisors and program directors, this action research will analyze reported cases of translanguaging practices. The analysis will include identifying recurring factors that made these practices mutually accepted or unaccepted in a domestic language

immersion program in the U.S. Further, this presentation will discuss social structures and practices related to language policing that may have contributed to the oppression/ and exclusion of non-dominant individuals and groups in the program.

As pedagogical implications, this presentation will suggest ways to adjust the language pledge to maximize both learning and the sociolinguistic welfare, as well as the personal well-being, of language immersion participants. This involves effective and balanced implementations of translanguaging, with the intent to prevent socially harmful language policing practices in a way that benefits not only the "weak" (the oppressed and excluded individuals) but also the community as a whole, including the "strong" (Sato & Kumagai, 2022).

11:45-12:15

Atsuko Takahashi (Smith College)

Mindful, Joyful Learning: How Culturally Immersive Trauma-Informed Pedagogies Support Japanese Language Learning in an Intensive Japanese Curriculum (English)

Given the rising concern over mental health issues and the increasing prevalence of social media and technology use, there is an increasing population of emotionally distressed students in higher education (U.S. Surgeon General's Advisory, 2023). This study assesses the effectiveness of incorporating Trauma-Informed Pedagogies (Thomson & Carello, 2022) into the Intensive Japanese curriculum. It specifically explores the impact of low-key, culturally immersive activities on student engagement and stress management in a rigorous academic setting. The study was conducted in a class of seventeen intermediate-level Japanese students and involved a series of small-scale, sustained language and cultural activities throughout a semester. These included Tadoku (Extensive Reading), Kanji calligraphy using a fude pen (disposable Japanese brush pen) at the beginning of class, and hands-on origami activities. The study was conducted using qualitative research methodology combined with ethnographic observation of the class by a research assistant, teacher journal entries, a focus group interview, and pre- and post-course anonymous surveys. Data were analyzed using the open coding method (Sato, 2008, 2019). Results indicated that activities such as fude pen calligraphy, short Tadoku sessions, and origami activities served as adequate breaks from intensive textbook-based learning, enhancing Kanji proficiency, reading comprehension, and stress reduction. Furthermore, adopting trauma-informed practices fostered a more personal and relaxed classroom atmosphere, facilitating unexpected connections among students and enriching their sense of community. This study implies that trauma-informed teaching and learning approaches would alleviate stress, enhance focus, and improve students' engagement in the overall Japanese learning experience, indicating a promising direction for inclusive and effective language pedagogy in contemporary educational and social settings.

Session 1 B: Robertson 002

Session Chair: Kazuko Saito (Hunter College of the City University of New York)

10:15-10:45

Asako Hayashi Takakura (University of California Los Angeles (UCLA))

学齡児童・生徒の海外経験がグローバル教育と早期多言語教育に与える影響(日本語)

日本の教育現場で「グローバル教育」という言葉は、主に今世紀から使われ出したが、アメリカでは70年代初頭から用いられ、80年代には学校教育のカリキュラムに取り入れられてきた。グローバル教育がアメリカを始め、欧米諸国では「地球規模の問題を扱うすべての分野と領域を包括する概念」として捉えられている一方、日本国内で「グローバル教育」という言葉は「他国の人とわかりあえる」すなわち「グローバル人材の育成＝英語力の強化」という観点で、英語教育に重きをおいたカリキュラムやプログラムについて語られている場面で多く見受けられる。

日本人の英語力が英語を使用言語としない他国の学生より低いと言う問題点が度々指摘される一方で、早期英語教育に力を入れ、日本国内で高い英語力を身につける「国産バイリンガル」養成を目指した教育機関は年々増加の傾向にあると言われている。近年では日本の早期英語教育では不十分だと考え、英語圏へ教育移住する家庭も増加している。

本研究では、海外子女が夏休みを利用して日本の小学校に一時的に通学する「体験入学」と日本の小中学生が英語圏の学校を訪問する「短期学校訪問」の事例と、コロナ禍におけるオンライン学習、交流との事例を比較分析し、さらに当事者8名へのインタビューを通し、学習言語が使用されている環境での学習効果と学習者の言語学習への動機付けを考察した。

本発表は研究データを基に年少者の多言語習得を目的とした教育の枠組みでの「留学」と「多言語交流」の意義を再考し、21世紀型の教育における「目標言語が使用されている環境での言語学習」の効果とグローバル教育の方向性を議論することを目的とする。

10:45-11:15

Nobumi Nakai (Meikai University)

言語研究の知見から日本の大学の留学生に向けた上級日本語コンテンツを考えるーあいまい表現に関する理論研究をもとに(日本語)

本研究では、大学の言語学系ゼミにおいて、日本人学生と共に学ぶ留学生のための上級日本語コンテンツとして「あいまい表現」に着目し、言語研究の知見を効果的に取り入れていく方法を検討する。あいまい表現は、状況次第で肯定的にも否定的にも使われる「大丈夫」などが良い例であるが、日本の留学生にとっても難易度の高い学習項目である。あいまい表現の曖昧性が何に起因して生じるかという問題も含め、言語学の専門家の間では当然のように理解されている知見であっても、それらが実社会の諸現場で十分に活用されているとは言い難く、日本語教育の現場も例外ではない。

研究方法は、文献調査とコーパスを用いて1]～5]の手順で行った。1] あいまい表現に関する理論研究に基づいた文献 今井・西山 2012, 森本 2022, 川添 2023 他を参照し、曖昧性が生じる要因別にあいまい表現のタイプを整理した。2] 曖昧性の出処が、言語的要因 意味や構造、抑揚などなのか、語用論的要因 場面や状況なのか、或いはその両方なのかを分析した。[現代日本語書き言葉均衡コーパス(を用いて解釈の傾向を事例数から確認した。[曖昧性の仕組みが複雑で汎用性が高いと思われる10のタイプを抽出し、ゼミ授業で導入するための作例を試み、実際のシラバスに組み込んだ。[日本人学生と留学生の双方からフィードバックを得た。

日本語を母語として扱う場合でも、外国語として扱う場合でも、あいまい表現には翻訳ツールやAIの技術だけでは対応し切れない複雑さがあることが、日本人学生と留学生の間で共感された。日本人学生も交えて議論することによって、あいまい表現という学習項目が、より効果的に上級日本語コンテンツとして機能した。

11:15-11:45

Fumi Yamakawa (Vietnam Japan University)

なぜ留学するのかーベトナムで日本語を学ぶ学習者のライフストーリーー(日本語)

本発表の目的は、ベトナム人日本語学習者に対して行ったライフストーリーから「なぜ留学するのか」という問いに対する答えを明らかにすることである。パンデミックをきっかけに現在では多くの大学でオンライン留学を導入している。そのメリットには、地理的な制約がないことや経済的負担や心理的負担を軽減できるなどが挙げられている(渡部・新見, 2022)。一方で、コロナ禍を経て越境する留学の意欲はむしろ高まっていると言う(中村, 2023)。

そこで、越境する留学の意義について改めて考えるため、ベトナムの大学で日本語を学ぶ学習者5名を対象に留学についてライフストーリー・インタビュー(桜井, 2002)を行った。5名のうち3名は2022年から2023年に日本の大学に留学した経験を持ち、残りの2名は2024年から2025年にかけて留学予定の学習者である。分析の結果、それぞれのストーリーは多様であったものの、留学経験のある3名は「コロナで断念した夢の実現」「直接体験の必要性」「親からの自立」などの理由で留学していたことがわかった。また、留学予定の2名も「直接体験の必要性」「日本語能力の向上」などの理由で留学を決意していた。

5名のライフストーリーからは留学が日本語習得や文化理解の手段であることを超え、体験を通じた自己変革を媒介に自分の人生を豊かにする「挑戦」あるいは「チャンス」として位置付けられていることがわかった。つまり、体験、それ自体に意味を見出し、自分の関心や価値観を掘り下げ、自己成長できる場として認識されていた。これらの結果をベトナムの社会的文脈に落とし込み、さらに留学の意義について考察する。

11:45-12:15

Tanno Koji (University of Kentucky)

映画や漫画のストーリーをどのように伝えるかー日本語母語話者と学習者のナレーション構造の違いー(日本語)

中級話者にとって大切なスキルの一つは、ナレーションが出来るということである。ACTFL OPI では、映画や漫画などのナレーションが要求されるが、映画などの複雑で長いストーリーを母語話者や学習者がどのように描写するかは、よくわかっていない。従来の研究のほとんどは、話者本人の実体験や絵本や4コマ漫画などの短い話に限定されているからである。

話が長く複雑な映画や漫画はどのように語られるのか。学習者にとって、どんなところが難しいのか。これらの問いに答えるために、本研究では、日本語母語話者と学習者が、口頭で伝えた映画や漫画のナレーションを、Labov(1972)の提案した構造分析の手法を用いて分析した。国立国語研究所の『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)』を使い、日本語母語話者 50 人と英語を母語としたアメリカ人学習者 50 人の口頭インタビューに出てくる映画や漫画のナレーションを分析した。

Labov は語りにおける 6 つの要素として、「概要」、「方向づけ」、「複雑化する行為」、「評価」、「結果」、「終結」を提案したが、分析の結果、これらの要素の使い方が母語話者と学習者の間に大きな違いがあることがわかった。母語話者は、「方向づけ」と「終結」を軸として物語を伝えたが、日本語学習者は、「概要」「複雑化する行為」「評価」を多用した。また、初級学習者においては、不十分な「方向づけ」がストーリー展開に支障をきたすこともわかった。この結果を踏まえて、この発表では、映画や漫画のナレーションに必要な練習を提案する。

12:15 - 12:45 p.m. -- Lunch Break @138 Shultz Dining Room
(Lunch is included in the registration fee.)

12:45 - 1:45 p.m. -- Poster Session

Robertson Bernstein Gallery

Noriko Fujioka-Ito (University of Cincinnati)

学習者の専門性をグローバル社会に繋げる内省活動を統合した個別日本語コース

コロナウイルス感染拡大中に教育界全般で状況に応じて授業形態を変えながら様々な工夫が必要となり、新たな教育方法とカリキュラム改訂の必然性に直面した。筆者が勤務する大学での日本語4年目の授業がコロナウイルス感染拡大の緊急事態宣言中に対面から非同期のオンラインに授業形態を変更した際、非同期のオンライン授業での学習の孤独化を避けるために、獲得している知識や技能について内省した内容を学生が提出し、教員が問題の根源が突き止められるようにフィードバックを提供する支援を行なった。2021年と2022年の学生と教員間の再帰プロセスを通して、すぐれたデジタルリテラシーの技能が獲得できる自己主導型学習力や、意欲的に良い学業の成果を得るために不可欠である自己制御学習力が向上し、問題追及ができる思考力や問題解決ができる実践力が高められることが判明した。2023年には学習の効果を上げるために内省の報告の仕方を変え、さらに教科書で取り扱われている一般的な日本文化・社会の知識に基づいた課題を超え、学生が置かれている共同体の社会的な関係性の中で言語活動を継続しながら日本で実施するインターンシップや留学の計画を立て始め、専門性の知識を広げさせる機会を与えた。本発表では、まず、非同期のオンラインコースで実施した内省とフィードバックとの再帰プロセスについて説明する。次に、改訂したカリキュラムの中で言語習得の学習活動を実施すると同時に、自己のアイデンティティを認識しながら専門性を活かしたグローバル人材として社会貢献が可能となる将来の人生の探索を行わせた例について述べる。

Tomomi Kakegawa, David Jones, Rossellin Gaitan, Qiwen Jiang, & Gail Walter (University of Wisconsin-Eau Claire)

Cultural Exploration in Japan: Planning and Executing a Multidisciplinary Research Trip

Our presentation illuminates the nuanced intricacies involved in planning and executing a three week research expedition in Japan, including a to-do list of travel preparation. With a focus on transformative experiences, our expedition aimed to deepen our understanding of Japanese experiences during WWII, examine the impact of popular culture on postwar US-Japan relations, and analyze consumer product design

for potential export. We intentionally emphasize the journey itself, shifting the focus towards the planning and execution process rather than the research outcomes.

The research team, led by a professor of American Literature, collaborated with a native Japanese-speaking faculty member from the Languages department. Inclusivity was key, with three students on board, including a non-Japanese learner and two students with five semesters of Japanese language studies.

Our pre-trip preparations embraced a comprehensive approach, leveraging the leader's experience in Okinawa as a Fulbright scholar. This expertise provided critical perspectives on broader geopolitical issues surrounding the historical conflict between the US and Japan. Additionally, we explored the pivotal role of popular culture in fostering positive exchanges, particularly in the aftermath of the apocalyptic wartime experience.

Furthermore, our team engaged in early preparation for the capstone project, guided by methodologies encompassing historical narrative and autoethnography. This process involved sourcing of materials and the formulation of research questions within the domains of narrative history and popular culture, providing a solid foundation for our exploration.

Through the sharing of our methodology and experiences, we aim to provide a valuable resource for educators and researchers contemplating similar international research endeavors. We underscore the transformative potential inherent in multidisciplinary and multicultural research excursions, offering practical guidance by delving into specific insights gained during our journey. We encourage active engagement from the audience, inviting questions and shared experiences related to collaborative fieldwork.

**Kazuko Saito (Hunter College of the City University of New York),
& Mieko Sperbeck (John Jay College of Criminal Justice of the City University of New York), & Chizuko Wallestad (Osaka Metropolitan University)**

「橋をかける日本語教育」への挑戦—タスクベースのバーチャル交流が育む学習者協働による新たな可能性—

本発表では、非日本語圏における日本語初級コースの設計において、学期末プロジェクトの遂行過程にタスクベースで行った日米バーチャル交流を組み合わせた効果について考察する。パンデミックを経験し、私達教師は「壁に囲まれた日本語教育」から「橋をかける日本語教育」（當作、2023）を実現する術を手に入れ、目標言語が使われている国と教室を繋ぐことがかつてより容易になった。米国北東部公立大学2校では年間約1400人の日本語学習者が在籍しており、任意で参加できるバーチャル交流の機会が提供されている。学期期間中に平日30分のセッションが毎晩4回提供され、学習者は予約制で国際交流に参加できるが、2023年の調査では約25%の学習者が参加するに留まった。

2023年夏学期の初級コースでは、従来のスタンダード・ベースのコースデザインを補強する形で、タスクベースのバーチャル交流を組み込んだ。この5週間のコースでは、学期末プロジェクトの課題である多読本作成の過程において、週1時間のバーチャル交流を必須とし、日本語学習者を主著者、日本側の交流相手を共同著者とした。主著者が、起承転結の四段構成においてドラフトを執筆、共同著者に口頭で紹介、フィードバックのやり取りを通じて、対人的コミュニケーション能力の向上を図った。学習者同士の協力や協働作業を促し、自己表現力や協働能力の向上を図ることを可能にした。学期終了後のアンケート調査で、学習者がこのタスクを肯定的に評価していることが分かった。多読本作成に起承転結の構成を紹介する方法は他大学にも継承され、タスクを課すバーチャル交流の方法に新しい可能性を見出すことができた。

Shinji Shimoura (William & Mary)

日本語学習におけるAIツールの活用：学習者の利用とその効果

近年、人工知能(AI)ツールが一般化し、より身近な存在となった。また、ChatGPTの登場に伴い、外国語教育においても、AIツールの利用などについて盛んに議論されている。自然言語処理の進歩により、コンピュータ/モバイル支援言語学習(CALL/MALL)アプリが苦手としていた、学習者が生成した外国語に対するフィードバックもAIツールでは、簡単に瞬時に行えるようになり、学習者の言語学習への活用も期待されている。しかし、学習者自身がAIツールを利用し、その教育効果に言及した研究、報告は多

くない。このような現状を踏まえ、本研究では、学習者の AI ツール利用と外国語学習への効果を検証するため、AI ツールから提供されるエラー訂正と建設的なフィードバックが初級日本語学習者の文章表現力（複雑性、正確さ、流暢さ）にどのような効果があるかを調査する。学習者は、まず、日記を書き、AI ツールがそれを評価する。その後、学習者は、AI ツールのフィードバックを基に自己の日記を見直し、必要と感じれば修正、訂正する。学習者は、1 2週に渡り、週 3 回 AI ツールを利用し、日記を書く活動に取り組む。AI を使った学習の効果を検証するため、学習者の文章表現力を第 1 週と第 1 2 週に測定する。また、学習者の外国語学習及び文章表現力に関する意識の変化を分析するため、第 1 週と第 1 2 週に外国語学習全般及びライティングに関する意識調査票に記入し、結果を分析する。本発表では、研究結果を基に、学習者の言語能力及び学習への意識の変化を紹介し、大学の日本語コースという環境下での AI ツールの有用性について議論したい。

Nobuko Wang (Senshu University)

メディアの日本語を活用した日本語音声教材

日本語の教材の一つとして、メディアの日本語を活用する指導法を提唱する。テレビ、ラジオなどのメディアでは、基本的には誰にでも理解しやすいように、適切な発音、話速が用いられる。また、複数の人とやり取りをする会話とは異なり、メディアの配信内容の多くは①聴衆への情報提供、②聴衆との内容の共有で、①は代表的なものがニュースや取材のレポート、そして②は娯楽番組や情報番組である。とくに後者は、内容の工夫や音声表現が聴衆の心をつかむカギとなる。テレビでは映像が主体となるが、ラジオなど音声メディアは音声のみの伝達で、聴いている人と同じものを想像し、共有する媒体である。とくに、音声表現は、自分の言葉を使う、個性を出す、五感を活用した言葉を選ぶ、緩急をつける、といった 4 つの側面を駆使した素材が凝縮しており、これを活用すれば言語教育の新しい教材が提供できる。しかし単純にその音声表現だけを練習するだけでは、メディアのもつ華やかさ、楽しさを再現できず、教室ではトキメキもない。そこでメディアを再現するプラットフォームとして、デジタル音声メディアサービスの中から、録音して配信する **s tand fm.** と、ライブ配信をする **LINE** ライブトークを利用し、授業で使用した。今回はライブ配信に焦点を当て、その構成と方法を具体的に報告する。配信をするグループは、**A: 司会進行**、**B: 街角リポーター**、**C: 進行指示のディレクター**の 3 者からなり、街角リポーターは実際に外に出て、スタジオ内の司会者とライブでやり取りをしながら配信する。内容は、街の様子レポート、食レポ、カルチャーレポートを使用した。台本の作成や話す練習など 4 技能を活かす練習ができる授業となった。

Takashi Yokota (Hokuriku University)

未入国留学生となった編入留学生の留学に対する意義の調査 — 一元編入留学生のインタビュー調査から —

日本が世界に対してより開かれた国へと発展するための留学生 30 万人計画によって、留学に対するハードルは以前より低くなり、日本に留学をする外国人留学生が増加した。グローバル化が進んだ留学の意義としては、語学の学習だけではなく、人々の交流の幅を広げること、異文化理解を深めることなどが挙げられる。そのため、留学によってどのような意識の変化があったのか、語学学習は効果があったのかなど留学の意義に関する調査は多い（池田 2011 など）。また、コロナ禍においてオンラインで時間や空間を越えた交流が容易にできるようになり、留学の意義について再考する研究も増えてきた（岩城・異 2021、村田 2022 など）。

また、留学の形も変化し、従来の短期留学、学位取得のための留学などから編入留学、ダブルディグリーなど留学の形も変化している。コロナ禍における編入留学は 2 年間という短い時間での留学であり、留学をしなくても自分の国で学位を取得できることなどから編入をしたが来日することができず、留学をあきらめてしまった学生も少なくはなかった。しかし、コロナによってさらに短い時間での留学となったにもかかわらず、留学をあきらめずに来日した学生もいる。このような留学生にとって短い期間での留学はどのような意義があったのだろうか。

そこで、本研究では、編入留学生が留学にどのような意義を感じていたのか、短い留学にどのような意義があったのかをインタビュー調査から明らかにする。留学を決めた時、留学に行けなくなった時、留学に行けるようになった時、留学が実現した時、そして、卒業後の留学に関する意識について調査を行い、その変化を分析する。

15-minute Break (1:45-2:00 p.m.) Drinks and cookies will be served.

2:00 -4:00 p.m. – Session 2

Session 2 A: Robertson 001**Session Chair: Yoko Sakurai (Baruch College, The City University of New York)****2:00-2:30****Naoko Sourial (Columbia University)**

先輩から後輩へ 日本語クラスのプレイリストを作る (日本語)

パンデミック後、対面授業に戻り約一年が過ぎた 2021 年春、ある学生に「日本語クラスのプレイリストを作ってほしい」と言われた。本発表では、米国東部私立大学の日本語 2 年生のクラスで続けられているプロジェクト「後輩へ贈るクラスのプレイリスト作り」について報告する。

本件は、学生が学習をする中で、自分に必要なリソースに気づいたことから始まった。ただ本来学習とは、学習者のニーズ・動機から生まれるものなのではないだろうか。Paesani & Menke (2023)は、外国語リテラシーとは、学習者がターゲット言語の texts を解釈し、自分の texts を創造できる能力を育てることであり、学習者によるコミュニケーションと texts との批判的な engagement なのだと言っている。プレイリストに関し、だれが何のためにどう作るのかについて教室で話し合った。そして、クラスのプレイリストには、楽曲に限らず日本語の学習に役立つ多様なメディアやどんなモダリティでもいいことにした。学生は自分の一年間の学習体験を振り返り、何が役立ち、楽しかったかを考え、後輩へ自分達が薦める歌・アニメ・アプリなどを選び、後輩へのメッセージを添えてクラスのプレイリストを創り、プレゼントすることになった。翌年、プレイリストを受け取った後輩から先輩へメッセージが送られた。

本プロジェクトを通し、学習者が、次の学習者に繋げていくという学習者同志の輪の中で、新しい texts を創造し、自主的に学習を行うという学習者エージェンシーが発揮され、学習者のエンパワメントに発展した状況を検討し、リテラシー育成の可能性と課題点を考察する。

2:30-3:00**Yuki Yoshii (Kwansei Gakuin University)**

初級日本語教科書にみられる高齢者像(日本語)

本発表では、教科書を批判的に読み、潜在的または顕在的に表象される高齢者像を明らかにする。これまで、自己“同一性”のパラダイムシフトが起きており、社会的範疇の構築過程に焦点を当てた研究が求められている。言語教育では、エスニシティやジェンダー論からの議論が盛んに行われている。しかし、とりわけ、日本語教育では「年齢」の観点からの議論は不十分である。そこで、本発表では「年齢」の観点から初級日本語教科書である『大地』シリーズを事例とし批判的に読むことにした。それは日本語教科書が、教師にとって「教え方」を提示する「ハンドブック」でもあり、学習者にとっては「日本語」におよそ初めて触れる媒体でもあることから、大きな影響を持つと考えられるためである。研究課題として、日本語教科書の記述の選択基準と、その選択基準に影響を与えた社会的条件がどのようなものであるかを設定した。分析の結果、「年を取ると、だんだん性能が悪くなります」というようなぞの式の問題に「耳」を回答させるものがあつた。ここにはエイジズムに基づいた高齢者像が前提にあることがうかがえる。「高齢者」に否定的なイメージを付与する問題は他にもあり、「何でもできるロボットがあつたら、何をさせたいですか」というインタビュー練習の例に「お年寄りの世話」が「地雷を探すこと」と同等の問題として扱われていた。このように問題の前提や例にエイジズム的思想が埋め込まれることで、それを常識化し、また、学習者の創造性や対抗の声を生み出すことが難しい構造になっている。日本語教育で学習者を社会的存在にするには、当然視される「年齢」の社会的な結びつきの可視化が必要だといえる。

3:00-3:30**Rieko Ishibashi (SUNY New Paltz)**

JPC (Japanese Popular Culture)を動機とする日本語学習者の背景理解、および JPC を組み込んだ初級授業の可能性(日本語)

日本語教育において、JPC (Japanese Popular Culture)の占める位置は近年ますます高まっている。JFの動機調査でも北米高等教育機関の91%がJPCは学習者の日本語学習の動機であると答えている。アニメやまんがを使った教材の開発もこの10年ほど様々な試みが行われてきた。しかしながら、JPCへの関心から日本語を学びたい学習者の動機と、教室での学習は効果的に結び付いているだろうか。特に初級レベルでは、生教材を使うことが難しいため中級になるまでアニメを使った学習は待つケースも多いと思われる。一方、近年、初級に学生が集中し中上級へ進む学生数の減少なども報じられている。そうした傾向を解消するためにも中上級でJPCの内容理解や文法などを学ぶ前に初級レベルでJPCを組み込み、学習動機の維持や学習効果の向上に結びつける試みが必要と考える。

発表では、まんがやアニメのグローバル化に関する研究 (McCloud 1994, 2006, Berndt 2010, Lu 2008, Brienza 2016) と学生のアンケート結果を踏まえ、何が学生をアニメやまんがに惹きつけるのかを分析し動機の背景、維持・向上のヒントを探る。具体的には、ナラティブ内に描かれる日本文化や生活風景はもちろん魅力的ではあるが、日本のハイコンテクスト文化や「うち」文化も読者、観客に影響を及ぼしていること、コンベンション、推し活などに見られる共同体願望が強いこと (Berndt, 2010)、他のメディアとは異なるマンガ・アニメ独自のナラティブを学生たちは楽しんでいることなどを考察する。こうした点を踏まえ、初級で教えるべき文法を基盤にしつつも、学習者がどこを目指して日本語を学びたいのかを自覚でき、教師はファシリテーターとしてそのゴールに向かって教室活動を行うことを目標とした授業の実践例を紹介する。

3:30-4:00

Mihoko Yagi & Asako Higurashi (Harvard University)

中級日本語学習者の発話における「気づき」を促す個人人口頭練習の試み(日本語)

日本語学習が中級へと進むにつれ、学習者の発話がより複雑になる一方で、個人差が一層目立つようになる。当校においては、夏期留学から帰ってきた学生、独学で入ってくる学生など、中級レベルにおいて、学年度開始時までの学習歴やニーズ、日本語の癖などが以前に増して多岐に渡り、求められる指導も多様化しているように思われる。アクセシビリティの観点からも、コースの中に多様な課題や評価方法を実施することが推奨されており (Georgetown University)、集団指導中心の大学の日本語コースでも一人一人に合わせた個別指導を取り入れることは有益だと考えられる。Chick (2013) は、学習者が自身の学びを新しい文脈で応用するためには、自身の理解度やパフォーマンスを計画・観察・評価するプロセスに使われるメタ認知スキルが重要だと主張している。また、上田 (2019) は、第二言語習得の文脈において、学習者の「気づき」は「目標言語の規範に近づくことを目指すときに必要な認知的活動」であり、それを促すことが教師の役割の一つであると述べている。このことから、学習者自身が自分の日本語の癖を自覚し、適宜修正できる力は、学習者が日本語学習を続ける上で必要であると考えられる。そこで、個々の学習者の能力や課題に応じて気づきを促すため、三年生中級日本語クラスにおける指導の一環として、各ユニットに1回、オンラインで個人人口頭練習を行った。学期を通して、学習者一人一人の発話の癖や課題を指摘・記録し次回までの目標設定を行い、学期の最後にその記録を基に振り返りを書かせ、アンケート調査を行った。本発表では、その具体的な実践内容及び記録と振り返りの考察、今後の課題を報告する。

Session 2 B: Robertson 002

Session Chair: Atsuko Takahashi (Smith College)

2:00-2:30

Naoko Nemoto (Mount Holyoke College)

留学中ならではの学びと振り返りを促すために(日本語)

本発表では、留学プログラムの選択科目コースで行われた二種類の活動から、日本へ短期(1、2学期間)留学中の日本語学習者たちが、留学中にどのような言語体験をしているのか、自身の留学前、留学中の日本語学習体験をどのように振り返るのかを観察し、送り出す側から見た日本滞在中の学習の可能性と、それを可能にするための留学前の準備とサポートについて考察する。

本発表の研究対象となったコースは、日本の短期留学プログラムにおいて英語で行われた選択科目の一つで、日本語の変遷やバリエーションについて考察するコースである。受講者は全員がアメリカの大学からの留学生で、日本語学習歴は、最短で大学の3学期間、最長で大学以前の学習を含め6年間であった。全員が、各自のレベルに合った日本語の授業も同時に受講していた。

一つ目の活動は、日本での生活の中で気になった日本語の表現についての考察を書くもので、大学で学んだ書き方とは異なる表示を用いた看板や標識の写真を含めた言語景観的な投稿や、自分が使われた表現を理解できなかったため困ったり、誤解してしまったりした場面の描写があった。もう一つの活動は、Project Based Learning (PBL)に基づいたグループプロジェクトで、それぞれのグループが日本留学を志す後輩たちを対象とした、留学前に知っておくべき日本語について書く選択をし、ニュースレターを作成した。どちらの活動においても、通学中の観察、それについてのホストファミリーとの話し合いなど、現地でこそその学習や振り返りが記録されている。本発表では、このような留学ならではの学びを促す準備やサポートについて模索する。

2:30-3:00

Yoshihiro Mochizuki (University of Michigan)

留学×多様性×アイデンティティ：インクルーシブな留学を考える(日本語)

留学先の異なる文化や社会に触れることで、留学生は自身のアイデンティティに新たな視点を獲得することができる。しかし、多様性に対する考え方や理解は国によって異なるため、多様性に不寛容な国に留学した場合、彼らは自身のマイノリティ性をカムアウトすることが必然的に留学経験に悪影響を与える可能性があることに意識的にならざるを得ない。

性の多様性を例にとると、性的マイノリティの権利が保護されている国もあれば、法律で罰せられる国や、ヘイトクライムから個人を守る法律がない国もある。そのため、性的マイノリティの留学生が、本国ではオープンであるにも関わらず、留学先では文化的な排斥を避けるために自身のアイデンティティを隠すケースも見られる。

本発表は、米国から日本への留学生に焦点を当て、性的マイノリティを含む、様々なマイノリティ性の開示の難しさを明らかにするとともに、多様なバックグラウンドを持つ学生の留学生生活を外国語教師がどのようにサポートできるかを考察する。

米国大学の方針の調査、各国語教師との対話、そして日本留学経験者のインタビューを通じて、これまで見過ごされてきた、留学における多様性とアイデンティティに関する問題が浮き彫りにされた。留学センターや教師の傾向として、「留学先の文化背景を理解し、それに適応した行動を指導する（日本の場合は「セクシュアリティを隠す）」ことが見受けられるが、それでは多様な留学生を受け入れるインクルーシブな環境を構築できているとは言えない。本発表を通じて、日本語教師が留学生の多様なアイデンティティの開示とインクルーシブな留学というものについて考察する一助となれば幸いである。

3:00-3:30

Atsushi Hasegawa (University of Hawaii at Manoa)

キャリアにつながる留学を目指してー夏期インターンシッププログラムの設計と運営の可能性と課題ー(日本語)

コロナ直前まで、留学を希望するアメリカの大学生は増加しており、それに伴って参加者の多様化と期間の短期化がここ十年の傾向となっている (Open Doors, 2021)。留学といっても通常の授業を履修するのみでなく、座学を離れた実践の場を提供するプログラムも増えており、学生の間にもサービサーニングやキャリアに対する意識が高まっている。しかし、就業経験を目的としたインターンシップの機会は非常に限られているのが現状である。特に、日本語を勉強している学生たちが日本で参加できるインターンシップには、(1) 日本語レベルの壁、(2) 受け入れ企業の数や職種の制限、(3) 学生と企業とのマッチングの難しさ、(4) 教育プログラムとしての質の担保、(5) 学生の金銭的な負担など、多くの課題が存在する。

この現状を打破するため、ハワイ大学マノア校では2022年度より、日本語三年次以上の履修者を対象に、夏期インターンシッププログラムを開始した。参加者は日本各地で六週間の就業研修に従事し、単位を取得する。事前準備として、渡日前に座学のコースを設置し、プロフェッショナルコミュニケーションや職場文化、社会人基礎力に関する講義・ディスカッションを行う。研修中は派遣先企業のスーパーバイザーとの評価表を通して、学生へフィードバックする。2023年度は、初年度の課題を解決し、より多くの研修先を確保した上で、異なるニーズの学生に対応できるよう、また、より教育効果が高まるよう、プログラムの改良を行なっている。

本発表では、プログラムの設計と運営に関して、特に、改善プロセスについて説明し、より持続・応用可能なプログラム設計・運営について考察する。

3:30-4:00

Azusa Suzuki (University of Fukui)

Z世代の留学意識変容—「トキ」「イミ」消費の観点から—(日本語)

アフターコロナの現在、Z世代と呼ばれる若者層には「トキ消費」「イミ消費」への消費行動変化が指摘される(中川 2022 ほか)。これまでのコンテンツの所有ではなく、その時「トキ」だけ、自分だけができる体験「イミ」へと評価対象が移行していることを示した呼称である。本研究では留学に対しても同様の傾向があると仮定し、日本と韓国の大学生を対象に、留学の目的/時期/動機づけなどに関する意識調査を選択式と記述式の二種類で行った。調査の結果、定性的にも定量的にも留学中の国内旅行やサークル参加など、体験に注目した「トキ」「イミ」消費への評価が確認でき、仮説を支持した。また、語学学習は必ずしも留学動機とならないこと、時期は大学2年生程度が適切と考えている先輩など体験者の経験をと、参考として重視していることも分かった。以上を参考に、本研究では留学と地域定着に繋がる授業提案を試みる。

日本留学に関し、山川(2012)が「自分の居場所づくり」としてのソーシャルネットワーク形成を指摘している。本研究では自分の居場所獲得を成功体験と見なし、より活発かつ持続可能な留学実現のためには、学内外を問わず成功体験の機会が留学生に多く与えられる必要があると結論づけた。留学経験者にとっては、留学の成功体験は自信や自己肯定感につながり(藤村 2014 など)、自己開示の一例として話しやすくなる。留学希望者にとっては身近な人の成功体験例を知ることが、次の対面留学を促すと考えられる。ただし、今回の調査は対象者が日韓の大学生それぞれ 20 名であることなど被験者の数が少なくパイロット版の域を出ない。今後より規模を広げて調査を行い、さらに具体的な授業提案に繋げたい。

.....
15-minute Break (4:00-4:15 p.m.) Drinks and cookies will be served.
.....

4:15 -5:45 p.m. - Panel Session

Robertson 100 Arthur Lewis Auditorium

日本留学プログラムの現状と課題 (日本語)

Chair: Tomoko Shibata (Princeton University)

Yoshimi Sakakibara (Hokkaido International Foundation: HIF)

Tomotaro Akizawa (Inter-University Center for Japanese Language Studies: IUC)

Miyuki Nishimata (Kyoto Consortium for Japanese Studies: KCJS)

Yukari Tokumasu (Princeton in Ishikawa: PII)
.....

5:45 - 6:00 p.m. Closing Remarks & Group Photo

6:00 -8:00 p.m. - Dinner Banquet @138 Shultz Dining Room

***Pre-registration required**